

論文内容の要旨

報告番号		氏名	松田 康裕
Neurocognitive functioning in patients with first-episode schizophrenia one year from onset, and comparison with patients 5 years from onset (和訳) 統合失調症初発エピソードの認知機能障害の経過と発症5年経過群との比較			

論文内容の要旨

統合失調症の症状には幻覚や妄想などの陽性症状や、意欲低下や感情平板化などの陰性症状、さらに中核的特徴と言われている記憶や注意、遂行機能などの認知機能障害がある。認知機能障害は社会的な機能低下と関連しているが、どのような経過を辿るかについては十分に知られていない。また統合失調症は再発リスクが高く、機能低下が起りやすいのは発症後5年間であることが指摘されており、初期治療は临床上重要な課題である。そこで、統合失調症の認知機能障害の経時的変化を明らかにするために以下の2つの検討を行った。

研究1では、統合失調症を発症してから2年以内の初発エピソードの統合失調症患者群(初発群)に対して6か月毎に精神症状や認知機能、社会機能を縦断的に評価した。ベースライン評価を行った26人のうち、6か月後の評価を行ったのは19人、12か月後の評価を行ったのは13人であった。研究2では、研究1の初発群のうち認知機能の評価が精神病症状によって影響を受けなかった6か月後の患者群(19人)と、統合失調症を発症してから5年経過した別の患者群(5年群、18人)とを比較検討した。

その結果、研究1では初発群において12か月のフォローアップで言語性記憶と運動速度、遂行機能が有意に改善していた。また遂行機能の改善度と陽性症状の改善度には有意傾向ではあるが、相関関係がみられた。研究2では、5年群は初発群の6か月後より有意に言語性記憶と遂行機能において有意に低下していた。一方で、流暢性において改善傾向であった。以上より、言語性記憶と遂行機能、流暢性が5年群と初発6か月群において有意に変化しており、それらの認知機能は統合失調症の進行性指標であることが示唆された。また遂行機能は統合失調症の状態像を反映しているかもしれない。発症後から有意な変化を認めなかったワーキングメモリと処理速度はさらなる追跡が必要であると考えた。